Interview

## 日本のモノづくりの結晶

# 「東京スカイツリー」をデザイン監修

### 彫刻家・東京藝術大学名誉教授 澄川喜一さん

写真提供　磯部巳之吉氏

**来年5月の開業が待たれる東京スカイツリー。634㍍という世界一の高さとともに、その美しい造形が注目を集めている。東京スカイツリーのデザイン監修を務めたのが彫刻家で元東京藝術大学学長の澄川喜一さん（80歳）である。**

澄川さんの作品には東京湾アクアライン浮島人工島の「風の塔」や海ほたるの「カッターフェイス」などの巨大な環境造形、北海道から鹿児島まで全国各地に設置されている野外彫刻、身近な所ではお住まいの清瀬市ケヤキロードギャラリーにある「そりのあるかたち'90」、今春リニューアルした清瀬けやきホールの壁面彫刻などがある。読者のみなさんもきっと、その素晴らしい芸術作品に接したことがあるにちがいない。

東京スカイツリーのデザイン監修にあたっては、ただの高い電波塔ではなく、日本独自の伝統美を生かし、美しさと不思議さをもつ魅力ある造形にしたいという思いがあった。

9月3日には東久留米経友会主催の講演会で「東京スカイツリーの秘密」と題して、その想いが語られた。

## 原点は法隆寺の五重塔

アーティストとして折々に日本の古い建築から学び、感銘を受けてきた澄川さん。特に法隆寺の五重塔は1300年以上も前に造られたものながら、台風にも地震にも倒れることなく美しい姿を残している木造建築だ。「狭い土地に高くて美しく、地震にも強い塔を建てるためには、五重塔しかない」と思ったそうだ。

五重塔の構造の特徴は、長い1本の柱がかんぬきのように中心部を貫く「心柱（しんばしら）」。周りの四天柱と側柱は最上層の大屋根の垂木と組み合うまで、心柱に触れることなく組み上げられている。そのため、地震や強風時にもそれぞれで動き、揺れを低減することができる。スカイツリーは五重塔と同じような、心柱の技法が反映された制御システムがとられている。

構造面だけではなく、澄川さんは五重塔の精神も強調する。五重塔の五が意味するものは「空・風・火・水・地」、つまり宇宙を表現したもの。スカイツリーは宇宙の神へのシンボリックな祈りの塔でもある…と。そう言われると、第2展望台から伸びるアンテナは五重塔の相輪のように見えてくる。

## 「不思議」さが魅力

東京タワーより幅が狭い敷地に、倍近い高さで建てられているスカイツリー。足元は一辺が約70㍍の正三角形、上にいくにつれて円形に変化していく独特の形状にデザインされている。3という数は最も少ない単位で形になり、正三角形は安定感があって強いからだ。撮影する場所によって、「そり」と「むくり」（膨らみ）ができて、スカイツリーは多彩な表情を見せる。一周してみないと全貌がわからない。

「友人から『塔が傾いてないか？』って電話があったのです。私は『しめしめ』と思いましたね」

見る角度によってはタワーが傾いて見えるという。この「不思議さ」こそ澄川さんが求める美であり、魅力を生む重要な要素である。「なぜ？」「どうして？」があるからこそ、人はそれに惹きつけられる。「モナリザ」しかり、「ピサの斜塔」しかり。「そり」「むくり」といった伝統木造建築様式が表現された「和の美」に、先端技術の粋が集められている。

東京タワーは鉄板をリベット（鋲）で留めてあるが、スカイツリーではすべて溶接でジョイント。厚さ10㍉もの鋼板をパイプに加工、溶接する職人の技、他の国では真似のできないモノづくり技術の結晶である。

カラーデザインの監修も手がけた。日本人の古来からの美意識に通じる白に、少し藍色が加えられている。パイプの影が天気や時刻によって、白磁のように、かすかに青みがかった輝きを見せる。

## 清瀬に住んで半世紀

昭和35年に清瀬のゴボウ畑80坪を買い、アトリエを建てた。彫刻作品を創るためにはアトリエがないと仕事にならない。資金は父親に融通してもらった。当時は電車が清瀬までが複線だったこともあるが、この地が何より空気のいいことが故郷、島根県に似ていて気に入った。周りは畑ばかりのその頃、冬は霜柱がつくので、出かける時は長靴を履いて、駅で靴に履き替えるのが常だった。

清瀬の街も半世紀の間に変貌を遂げたが、「今も空が広くて、畑を耕す人がいて、人々が挨拶しあう。ゆったり感がありますね。文化が育つには空間がないとだめなんです。人と人がぶつかり合うような混雑した所には文化がないでしょう」

けやき通りをよく散歩する。ここはボランティアが清掃したり、市民が大切に守っている通り。「私も空き缶が落ちていたら拾いますが、ブラブラしながらだからボランティアですね（笑）」

全国各地から招聘され、講演会で多忙を極める日々ながら、現在、巨大なモニュメントを制作中でもある。創作への意欲は限りなく、澄川さんが歩みを止めることはない。

古代の日本人の知恵と感性が時空を超えて現代へ、そして未来へとつながる。大震災、原発事故、台風被害と日本全体が下向きの今、スカイツリーは「上を向いて歩こうよ」と希望の灯をともす木になるのでは。

「オールジャパンでつくられた、東京スカイツリーは江戸情緒に満ちた区域に建てられています。世界に誇れる日本の良さを海外へ向けても発信してほしい」

すみかわ・きいち

1931年　島根県生まれ　日本芸術院会員　紫綬褒章　文化功労者　第8回平櫛田中賞、日本芸術院賞、恩賜賞　NHK放送文化賞など受賞多数　清瀬市在住